

2022年秋学期（ポストコロナ期）に来日した交換留
学生の生活と満足度
-留学生アンケート結果からの一考察-

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2023-12-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三牧,純子 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/0002000216 |

2022 年秋学期 (ポストコロナ期) に来日した 交換留学生の生活と満足度 —留学生アンケート結果からの一考察—

三 牧 純 子

I. はじめに

留学生の受入れと派遣を通じた交流は、「我が国と諸外国との間の親密な人的ネットワークを形成するとともに、相互理解の増進や友好関係の深化を図る上で、非常に効果的」(文部科学省1)であり、その重要性は世界のグローバル化の進展とともに高まりつつある。

明治大学においては2012年以降、年間100名単位の交換留学生を受け入れ、2019年度にはその数は311名にも達した。しかし、直後のCovid-19発生に伴い、2020年度から2022年春学期まで対面またはオンラインでの受け入れとなり、来日する交換留学生数は激減した。そして2022年3月以降の政府による入国制限の緩和に伴い、徐々にその数は回復し、同年春学期は44名、同秋学期は200名を受け入れた。

今後、交換留学生の来日の増加が見込まれる中、交換留学生の満足度が向上するような支援を検討してゆく必要がある。こうした背景を踏まえ、本論では、2022年秋学期に明治大学に在籍した交換留学生を対象に実施したアンケート結果を踏まえ、彼らの留學生活について定量的側面と定性的側面から概観し、留学生の満足度と目的達成度の向上につながる支援について検討をする。

Ⅱ. 調査目的・方法

1. 調査期間

2022年12月1日から2023年1月23日まで

2. 調査方法

2022年度秋学期に在籍し、同年度末までに帰国する交換留学生に対して、Microsoft formsによるオンラインアンケート調査を実施し、記名方式で回答を求めた。回答する際には、英語か日本語のいずれかとした。なお、当該学生へのアンケートの回答依頼およびデータの回収については明治大学国際教育事務室の支援を受け、同室が対応した。

3. 調査対象者

132名（うち17名は同年春学期からの在籍者）全員から回答が得られた。

4. 調査項目

アンケート項目は、定量的側面と定性的な側面の2つから構成された。項目は表1のとおり。

表 1：アンケート項目と回答方法

| | | | |
|-----|------------------------------|---|------|
| (1) | 定量的側面に関するもの | | |
| (A) | 課程 | 博士か修士か学部か (3 択) | |
| (B) | 住居名 | 6 施設からの選択 (6 択) | |
| (C) | 留學生活に満足されましたか | excellent, good, fair, bad, poor か (5 択) | |
| (D) | 明治大学の授業はどうでしたか | | |
| (E) | 他の學生と交流することができましたか | | |
| (F) | あなたの留學の目的はどれくらい達成されましたか | | |
| (G) | 明治大学手配の寮に満足しましたか | | |
| (H) | 国際教育事務室のサポートはいかがでしたか | | |
| (I) | 学期開始前に提供された情報は適切でしたか | | |
| (2) | 定性的側面に関するもの | | |
| ・ | 明治大学（日本）へ来る前に一番心配だったことは何ですか？ | | 自由記述 |
| ・ | 留學中に最も注力したことは何ですか | | |
| ・ | 留學中に最も嬉しかった経験は何ですか | | |

Ⅲ. 結果

1. 回答者 (132 名) の属する課程

博士課程 2 名、修士課程 25 名、学士課程 105 名

2. アンケートの結果 (定量的な側面)

(1) 授業

「明治大学の授業はどうでしたか」という問いに対して、8 割以上の学生がポジティブ (Excellent 31%、Good 51%) に評価をした。Excellent と評価した学生は、「先生が交換留学生に対してよく気にかけてくれた」、「先生もクラスメイトも親切」、「学生間のディスカッションを促してくれた。とてもエキサイティングだった」そして「自分の関心分野を深く学べるように授業が進行された」ことを理由に挙げた。

一方で、Bad と評価した学生はかなり少数 (2%) であるが、その理由を「先生が殆ど英語を話さなかった」、「自身の日本語力のせいか、教員の話あまり聞き取れなかった」と言語の壁を理由として挙げた。

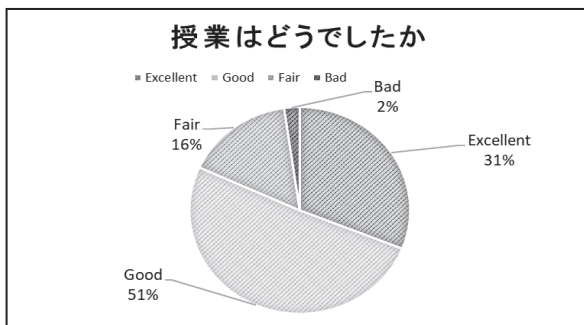


図 1 : 明治大学の授業はどうでしたか (n=132)

（2）寮

①入居状況（「住居名」）

明治大学手配寮の入居者数は112名（明治大学グローバルヴィレッジ（MGV）67名、和泉インターナショナルハウス24名、DK HOUSE 10名、東京女子学生会館7名、狛江インターナショナルハウス3名、ユニエミール明大前1名）。個人で宿泊先を手配したのは20名だった。

②寮生活の満足度

「明治大学手配の寮に満足しましたか」という問いに対して、8割以上の學生がポジティブ（Excellent 48%、Good 33%）な評価を行った。「Excellent」と回答した理由は「部屋がきれい」、「寮長やスタッフがやさしい」そして「アクセスがよい」というものが多かった。

他方で、Fair以下の評価（Fair 17%、Bad 2%）の理由は「賃料が高い」、「バスルームの排水が時々流れづらい」、「十分なアメニティ（ユニット毎のゴミ箱、台所用品）がない」等であった。

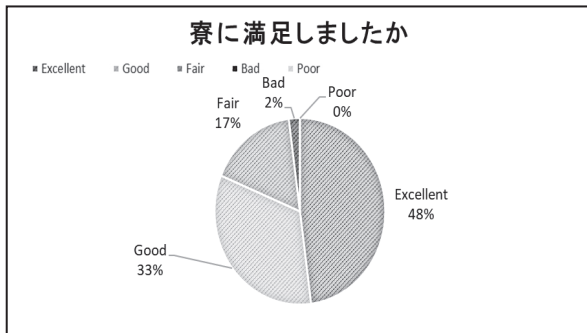


図2：明治大学手配の寮に満足しましたか（n=112）

（3）他の學生との交流

「他の學生と交流することができましたか」という問いに対して、約8割の學生がポジティブに評価（Excellent 40%、Good 39%）した。その理由

として、「交流イベントがたくさんあったこと」、「授業や日本語カフェで友達ができたこと」、「明治大生や交換留学生の友達ができたこと」を挙げた。

他方で、Fair 以下 (Fair 16%、Bad 3%、Poor 2%) とした学生はその理由として、「オンライン授業のため、他学生との接触機会が限られた」、「殆どの日本人学生は英語を話さない」、「言語の壁があった」および「論文執筆で多忙だった」を挙げた。

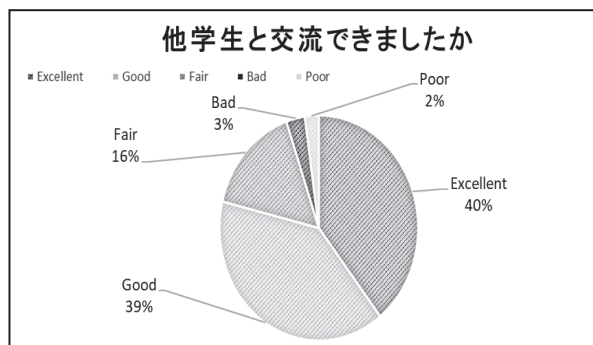


図3：他の学生と交流することができましたか (n=132)

(4) 国際教育事務室による支援

①国際教育事務室のサポート

「国際教育事務室のサポートはいかがでしたか」という問いに対して、約9割の学生がポジティブな評価 (Excellent 51%、Good 36%) を行った。Excellent と回答した学生は、その理由として「問い合わせへの回答が迅速で、十分な情報が含まれていた」、「困っている時に助けてくれた」とポジティブな実体験を踏まえた回答が多かった。

②学期開始前に提供された情報

「学期開始前に提供された情報は適切でしたか」という問いに対して、約8割の学生がポジティブな評価 (Excellent 36%、Good 46%) を行った。

Excellent と回答した学生は、その理由として「役立った」、「必要情報が

網羅されていた」ことを挙げた。他方で、少数意見であるがネガティブなコメントとして、「講義の選択についての情報が不足」、「時間割の作り方と第一週の受講方法についてわからず、混乱した」というものがあった。

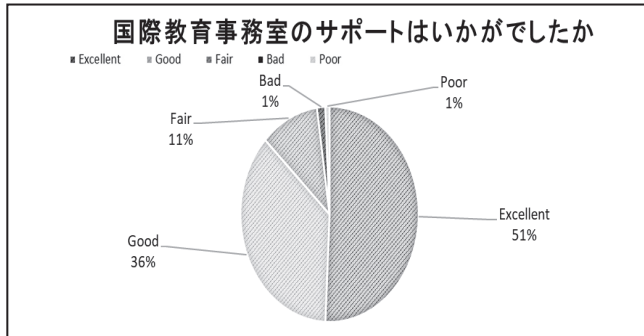


図 4：国際教育事務室のサポートはいかがでしたか (n=132)

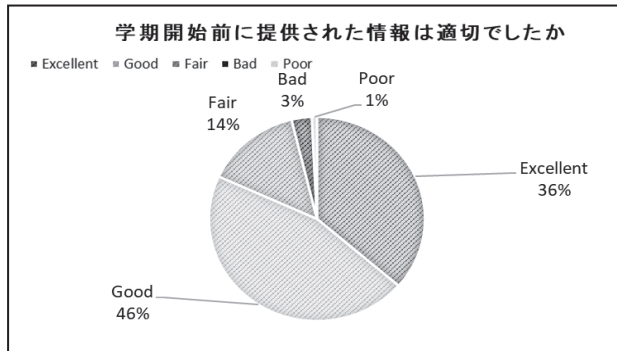


図 5：学期開始前に提供された情報は適切でしたか (n=132)

(5) 留学満足度と留学による自身の目的達成度

① 明治大学への留学の満足度

「留学生活に満足されましたか」という問いに対して、約 9 割の学生がポジティブに評価 (Excellent 52%、Good 37%) しており、高い満足度がうか

がえる。Excellent と回答した学生は、その理由を「母国と違ったアングルでいろんな知識を学べた」、「素晴らしい体験ができた」、「やりたかったことができた」、「ゼミの活動が楽しかった」等、様々な回答があった。他方で、少数ではあるがネガティブな評価を行った学生はその理由としてオンライン授業であったこと等を挙げた。

②目的達成度

「あなたの留学の目的はどれくらい達成されましたか」という問いに対して、ポジティブな評価は約9割（Excellent 40%、Good 46%）に及んだ。Excellent と回答した学生はその理由を「日本語力の向上（例：「敬語と漢字の習得」、「会話力向上）」とするものが最も多く、続いて、「単位が取得できた」、「研究を進めることができた」、「友達ができた」等の様々な回答があった。

一方で、Fair 以下（Fair 11%、Bad 3%）の評価をした学生はその理由について「日本語能力が来日前に想定したようには伸びなかったから」とするコメントが最も多かった。そのほか、「自身の専攻分野とは違うものだった」、「複数のキャンパスに通っており、友達関係が分散したから」等のコメントがあった。

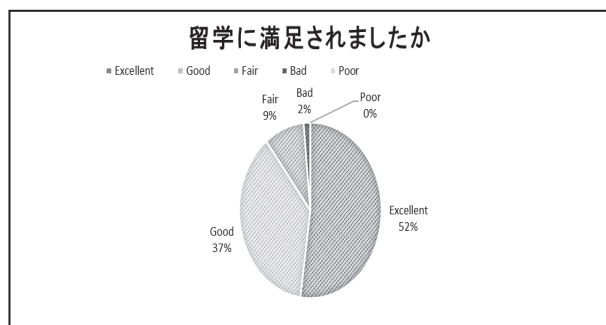


図6：留学に満足されましたか (n=132)

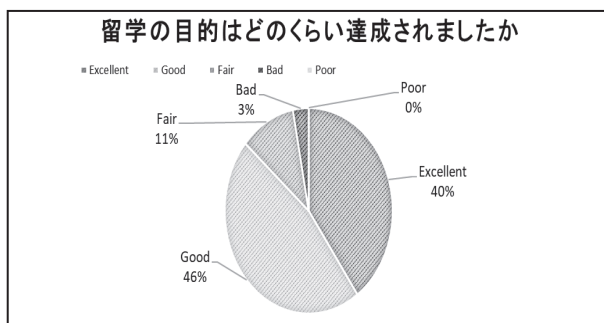


図7：留学の目的はどのくらい達成されましたか (n=132)

③留学の満足度と目的達成に影響を与え、関連がある因子とは

留学の満足度と目的達成に影響を与え、関連がある因子を抽出する目的で相関行列および回帰分析を行った。

・【方法】

相関行列は表1の設問（CからIまでの7項目）に対して実施し、Spearmanの順位相関係数とペアワイズのp値（多重比較：Holm法）を算出した。つぎに、交絡を除外し、留学の満足度に影響を与え、関連がある因子を抽出する目的で、目的変数を「設問C：留学生活に満足されましたか」、説明変数を表1の設問（A, B, D, E, G, H, Iの7項目）とし、回帰分析Aを行った。さいごに、交絡を除外し、留学の目的達成に影響を与え、関連がある因子を抽出する目的で、目的変数を「設問F：あなたの留学の目的はどれくらい達成されましたか」、説明変数を表1の設問（A, B, D, E, G, H, Iの7項目）とし、回帰分析Bを行った。

なお、5件法のリッカート尺度を用いた設問は、Excellentを5点、Goodを4点、Fairを3点、Badを2点、Poorを1点と処理した。

・【結果】

はじめに相関行列の結果を示す。

表2：相関行列結果

Spearman correlations:

| | 設問C | 設問D | 設問E | 設問F | 設問G | 設問H | 設問I |
|-----|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 設問C | 1.000 | 0.524 ** | 0.384 ** | 0.363 ** | 0.409 ** | 0.486 ** | 0.377 ** |
| 設問D | 0.524 ** | 1.000 | 0.238 | 0.272 * | 0.454 ** | 0.278 * | 0.311 * |
| 設問E | 0.384 ** | 0.238 | 1.000 | 0.337 ** | 0.169 | 0.312 * | 0.168 |
| 設問F | 0.363 ** | 0.272 * | 0.337 ** | 1.000 | 0.246 | 0.438 ** | 0.358 ** |
| 設問G | 0.409 ** | 0.454 ** | 0.169 | 0.246 | 1.000 | 0.317 * | 0.287 * |
| 設問H | 0.486 ** | 0.278 * | 0.312 * | 0.438 ** | 0.317 * | 1.000 | 0.539 ** |
| 設問I | 0.377 ** | 0.311 * | 0.168 | 0.358 ** | 0.287 * | 0.539 ** | 1.000 |

Adjusted p-values(Holm's method) **p<0.01, *p<0.05

設問 C と比較的高い相関を示した因子として、設問 D ($r=0.524, p<0.01$) と設問 H ($r=0.486, p<0.01$)、設問 G ($r=0.409, p<0.01$) がある。いずれも正の相関を示し、授業内容、事務室のサポート、手配された寮は留學生活の満足度に特に影響する因子と考えられる。また、設問 F と比較的高い相関を示した因子として、設問 H ($r=0.438, p<0.01$) がある。こちらも正の相関を示し、事務室のサポートは留學の目的達成に特に影響する因子と考えられる。

つぎに、回帰分析 A の結果を示す。

表3：回帰分析 A の結果

目的変数：Please rate your satisfaction with the overall study abroad experience at Meiji University. (留學生活に満足されましたか?)

| | 回帰係数推定値 | 標準偏回帰係数 | 95%信頼区間下限 | 95%信頼区間上限 | 標準誤差 | t統計量 | P値 |
|---------------|-----------|---------|-----------|-----------|-------|--------|-------|
| (Intercept) | 1.346 | 0.000 | 0.453 | 2.239 | 0.448 | 3.002 | 0.004 |
| 設問A[学部] | reference | | | | | | |
| 設問A[修士] | -0.176 | -0.206 | -0.479 | 0.126 | 0.152 | -1.161 | 0.249 |
| 設問A[博士] | -0.459 | -0.592 | -1.499 | 0.581 | 0.522 | -0.879 | 0.382 |
| 設問B[明治] | reference | | | | | | |
| 設問B[ユニエメール] | 0.067 | 0.081 | -1.009 | 1.142 | 0.540 | 0.123 | 0.902 |
| 設問B[拍江] | -0.214 | -0.253 | -0.968 | 0.541 | 0.379 | -0.564 | 0.574 |
| 設問B[東京女子] | -0.128 | 0.000 | -0.883 | 0.626 | 0.379 | -0.339 | 0.736 |
| 設問B[DK HOUSE] | 0.052 | 0.061 | -0.725 | 0.828 | 0.390 | 0.133 | 0.895 |
| 設問B[和泉] | -0.279 | -0.360 | -0.546 | -0.012 | 0.134 | -2.083 | 0.054 |
| 設問D | 0.238 | 0.288 | 0.071 | 0.404 | 0.084 | 2.845 | 0.006 |
| 設問E | 0.217 | 0.256 | 0.080 | 0.353 | 0.068 | 3.163 | 0.002 |
| 設問G | 0.072 | 0.000 | -0.089 | 0.234 | 0.081 | 0.894 | 0.374 |
| 設問H | 0.196 | 0.230 | 0.016 | 0.376 | 0.090 | 2.174 | 0.033 |
| 設問I | 0.037 | 0.048 | -0.133 | 0.208 | 0.086 | 0.437 | 0.663 |

以上より、目的変数「設問 C」に独立して影響を与え、関連する因子として設問 D、設問 E、設問 H が抽出された。それぞれの標準偏回帰係数の大小関係から設問 D ($\beta=0.288$, $p=0.006$)、設問 E ($\beta=0.256$, $p=0.002$)、設問 H ($\beta=0.230$, $p=0.033$) の順に影響力が強いと考えられる。よって、授業内容、他の学生との交流、国際教育事務室のサポートの順に留学生生活の満足度に独立した影響する因子と考えられる。

最後に、回帰分析 B の結果を示す。

表 4：回帰分析 B の結果

| 目的変数：Please rate how much you were able to achieve your student mobility goal. (あなたの留学の目的はどれ位達成出来ましたか?) | | | | | | | | |
|---|-----------|---------|-----------|-----------|-------|--------|-------|--|
| | 回帰係数推定値 | 標準偏回帰係数 | 95%信頼区間下限 | 95%信頼区間上限 | 標準誤差 | t統計量 | P値 | |
| (Intercept) | 1.277 | 0.000 | 0.256 | 2.298 | 0.513 | 2.491 | 0.015 | |
| 設問A[学部] | reference | | | | | | | |
| 設問A[修士] | -0.017 | -0.019 | -0.362 | 0.329 | 0.174 | -0.097 | 0.923 | |
| 設問A[博士] | -0.031 | -0.039 | -1.221 | 1.158 | 0.597 | -0.052 | 0.958 | |
| 設問B[明治] | reference | | | | | | | |
| 設問B[ユニエメール] | -0.614 | -0.719 | -1.845 | 0.616 | 0.618 | -0.994 | 0.323 | |
| 設問B[狛江] | 0.671 | 0.765 | -0.192 | 1.533 | 0.433 | 1.548 | 0.126 | |
| 設問B[東京女子] | 0.314 | 0.000 | -0.549 | 1.176 | 0.433 | 0.724 | 0.471 | |
| 設問B[DK HOUSE] | 0.067 | 0.076 | -0.821 | 0.956 | 0.446 | 0.151 | 0.880 | |
| 設問B[和泉] | 0.143 | 0.179 | -0.162 | 0.449 | 0.153 | 0.935 | 0.353 | |
| 設問D | 0.069 | 0.081 | -0.121 | 0.260 | 0.095 | 0.726 | 0.470 | |
| 設問E | 0.225 | 0.256 | 0.069 | 0.381 | 0.078 | 2.869 | 0.005 | |
| 設問G | -0.017 | 0.000 | -0.202 | 0.167 | 0.093 | -0.189 | 0.851 | |
| 設問H | 0.306 | 0.346 | 0.100 | 0.511 | 0.103 | 2.963 | 0.004 | |
| 設問I | 0.111 | 0.138 | -0.084 | 0.306 | 0.098 | 1.129 | 0.262 | |

以上より、目的変数「設問 F：あなたの留学の目的はどれくらい達成されましたか」に独立して影響を与え、関連する因子として設問 E、設問 H が抽出された。それぞれの標準偏回帰係数の大小関係から設問 H ($\beta=0.346$, $p=0.004$)、設問 E ($\beta=0.256$, $p=0.005$) の順に影響力が強いと考えられる。よって、国際教育事務室のサポート、他の学生との交流の順に留学の目的達成に独立した影響する因子と考えられる。

・【考察】

これらの結果より、留学生生活の満足度に影響する因子として、授業内容、国際教育事務室のサポート、他の学生の交流などが特に重要になると考えられる。また、留学の目的達成に影響する因子として、事務室のサポート、他の学生との交流などが特に重要になると考えられる。これらに共通する因子

である事務室のサポート、他の学生との交流が最も重要課題であり、授業内容、手配された寮の質も向上していく必要がある。

3. アンケートの結果（定性的な側面）

（1）来日前の心配事

「明治大学（日本）へ来る前に一番心配だったことは何ですか？」という問いに対する答え（自由記述）からキーワードを抽出し、内容別にカテゴリー分類をした（複数回答あり）（図8参照）。

過去の訪日経験等を理由に「不安はなかった」とする回答が13件あったものの、大部分の学士は何らかの心配事を抱えていた。最も多かった回答は、日本語能力に関すること（42件）であり、「日本人とコミュニケーションが円滑にできるのか」と「言葉の壁を乗り越えられるか」心配だったとのコメントが多く見受けられた。そのほかは日本の社会生活への適応（21件）、他者との関係性構築（18件）、授業のレベルや進度（15件）、査証や国内での行政手続きの遂行（13件）、滞在先（寮生活、部屋等）（6件）、Covid-19の感染対策（5件）、都内の交通システム（2件）、留学資金（2件）と続き、留學生活の全般に及ぶことが分かる。

なお、コメントの中には、こうした心配事を解決した経験について言及がなされているものもあった。たとえば、「日本語が話せないのが最初は不安でしたが、みんなが親切に英語の知識（英訳）を教えてくれたので、だんだん日本語に慣れた」というコメントの他、「転入の届け出など、入国してからの手続きが一番心配でしたが、ボランティアの皆さん（注：国際教育事務室で「学生ボランティアを」募集・手配）に大変お世話になり、すぐ解決できた」とピアサポートについて言及しているものもあった。

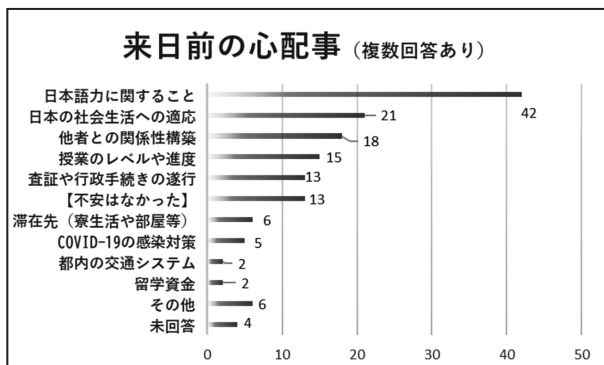


図8：来日前の心配事

（2）留学中に最も注力したこと

「留学中に最も注力したことは何ですか」との問いに対する回答（自由記述）からキーワードを抽出し、内容別に7つ（「授業・研究」、「日本語学習」、「日本文化を学ぶ」、「他者との交流」、「旅行（散策含む）」、「日々の暮らし」および「その他」）に分類した（複数回答あり）（図9参照）。

日本語学習（35件）が最も多く、授業・研究（33件）が続き、勤勉な様子が窺えた。また、来日前の日本語についての不安感が学習動機につながったものとも考えられる。

その他は旅行（東京近郊の散策含む）（29件）、他者との交流（27件）、日本の文化を学ぶ（22件）、「初めての一人暮らし」や「日本生活体験」といった日々の暮らし（16件）が続いた。「その他（12件）」に含まれる少数意見の中には、就活やインターンシップに関するもの（3件）もあった。コメントの中には例えば、「新しい」人との出会い、「新しい」学びといったように「新しい」という形容詞が10名以上のコメントに見られた。

2022年度秋学期はCovid-19の感染予防のため、公共の場ではマスク着用が求められているなど、一定の制限のあった時期ではあったが、「新しい」何かを求めて、様々な場面でアクティブに留学生活を送っていた留学生の様

子が窺える。

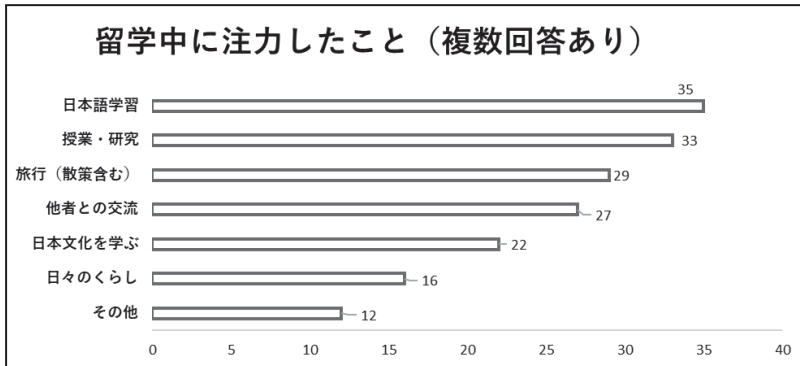


図9：留学中に注力したこと

（3）留学中に最も嬉しかった経験

「留学中に最も嬉しかった経験は何ですか」という問いへの回答（自由記述）について、キーワードを抽出し、「交流、旅行、学習（授業やゼミ）、日常生活、その他」の5つのカテゴリーに分類した（複数回答あり）（図10参照）。5割近い（46%）学生が最も嬉しかった経験として「交流」を挙げた。この「交流（46%）」カテゴリーは、一般の日本人等との交流を含む「様々な場面での交流（27%）」、「学内のイベント（国際教育事務室や学生交流団体等によるイベント）（9%）」、「ゼミやクラス（7%）」および「サークル（3%）」に分けられ、学内の様々な団体によるイベントが一定の貢献を果たしていたことが窺える。また、コメントの中には学生交流団体主催の学外へのツアー、ゼミでのフィールドワーク、明大祭へのサークルでの参加など、「非日常」の場面で他の学生達と交流したことに言及する学生が10名程いた。

続いて、旅行（28%）であり、富士山や関西方面への訪問を挙げている学生が多かった。さらに、授業やゼミでの「学習」（8%）と回答した学生は、「ゼミのフィールドトリップにおける日本の新たな側面の発見」、「課題の達

成」を理由に挙げた。「日常生活」（7%）と回答した学生は、「寮生活そのもの」、「夜の夕食」等、普段の生活に嬉しさを見出していた。ある学生は「母国は夜間の外出は緊張感が伴うが、日本ではリラックスして過ごせた」と述べた。

各留学生が様々な場面でポジティブな感情を味わっており、特に他者との交流体験がそうした感情をもたらしていることがうかがえる。

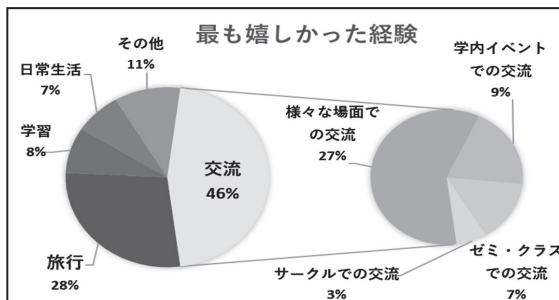


図 10：最も嬉しかった経験（複数回答あり）

（4）定性的な側面からのまとめ

定性的な側面についてのアンケート結果からは、来日前は留学生活について様々な不安を抱えつつも、新たな何か（経験や出会い）を求めて、留学中に打ち込むことを見つけ、他者との交流を中心に様々な場面でポジティブな感情を味わっていたと考えられる。

また、こうしたポジティブな交流の機会の創出に、国際教育事務室や国際交流の活動を行う学生団体が一定の貢献を果たしていることが判明した。さらに「非日常」場面での仲間（他の学生）との交流はポジティブな感情をもたらす可能性があることがうかがえる。

他方、アンケートの結果から、交換留学生が来日前に様々な心配事を抱えており、特に日本語への不安感が来日後の学習の動機付けになっているとも

考えられるが、こうした心配事に寄り添った支援をすることで、留学生活がより円滑なものとなる可能性があると考えられる。

IV. まとめ

本調査の結果から、今回の調査対象の交換留学生の留学時期（2022年度秋学期）はCovid-19の影響により、行動に制限のある時期ではあったが約9割の留学生にとって満足度が高く、かつ、留学の目的を果たせたものであったといえる。

また、交換留学生は来日前に様々な心配事を抱えていたが、来日後は個人の関心に応じて日本語学習や授業等、様々なことに注力していることが分かった。さらに、留学中に交流の場面を中心にポジティブな感情を味わっており、そうした交流の促進に国際教育事務室や国際交流を行う学生団体が一定の貢献を果たしていることが判明した。

今後さらに交換留学生の満足度や目的達成度の向上を目指す場合に、どのようなことに留意すべきだろうか。

先述のとおり、回帰分析の結果から「国際教育事務室を始めとする事務方のサポート、他の学生との交流が最も重要課題であり、授業内容、手配された寮の質も向上していく必要がある。」と考えられる。このため、本稿では、大学側のサポート（支援体制）と交流が重要課題であることに鑑み、交換留学生が明治大学生や他の交換留学生との交流を生み出す仕組みづくりの支援について考えたい。

仕組みづくりを考えるにあたり、ソーシャルキャピタル（Social Capital）（以下「SC」）の概念が有用であると考えられる。SCの概念は多様であるが、『信頼』『規範』『ネットワーク』といった社会組織の特徴（厚生労働省2）に示されるように、「つながり」、「仕組み」等、「目には見えない」とされてきたものに、注意を向けるという意味で意義がある。Uphoff 3）らはSC

を、社会組織制度、規範、ネットワークに関連した「制度的」SCと、価値感、基準及び信条といった個人の心理や態度に影響を与える「認知的」SCに分類している。

かねてより、明治大学では和泉キャンパスを拠点に国際交流活動をする1, 2年生を主体とする公認の学生団体との連携により、各種のイベント等を実施している。一方、学内には4キャンパスそれぞれで国際交流を独自に行っている団体が複数存在しているが、こうした情報が一元的に書面等でまとまった形で交換留學生に提供されておらず、交換留學生が全体像をつかむことが難しかった。また、大学側にとっても、一つの学生団体のみに留學生関連行事への支援を依存している場合、団体の実施体制の状況に左右されかねない状況があった。

このため、今後は図11のように、大学が学内の様々な学生団体や学生寮と緩やかなつながり（制度的SC）を構築し、これを母体として来日前のオンライン上の交流、来日直後のイベント等で連携しつつ、交換留學生向けのイベントを行うことを検討したい。また、大学から、交換留學生に各学生団体の情報を一元的に提供することにより、交換留學生が効率的に学内の交流情報にアクセスできるように促したり、大学から学生団体に交換留學生のニーズ等を伝えたりする等ハブ機能を果たすことで、SCの蓄積に留意してゆきたいと考える。

これにより、学生団体にとっても、顔なじみのメンバーとともに安心して交換留學生に対してより効率的にアプローチできるだけでなく、様々な特色のある他団体との交流を通じて刺激し合ったり、団体間の連携（制度的SC）につなげたり、あるいは学内の個人レベルでのネットワークの拡大等、SCの蓄積につなげることが期待できる。一方、大学側にとっても、イベントの担い手を多様化することで、より柔軟な支援が可能となると考えている。

なお、学生団体による支援以外にも、明治大学ではこれまでに留學生の行政手続きを支援するボランティアを公募し支援する等様々な対応を行ってき

た。こうした取り組みも可視化し、SCを構成する要素として改めて捉え直し活用することで、より学内の制度的SCの強化につなげることも考えられよう。

また、制度的SCと認知的SCは、「相互補完的であり、構造的な要素を維持しているのが認知的要素であり、認知的要素は構造的要素により、強化、再生産されているとされる」(内閣府2)。つまり、つながりという仕組み(制度的SC)を構築することで、交換留学生と明治大学生それぞれのポジティブな価値観(認知的SC)の蓄積が促進され、さらに、学内の有機的な交流につながる事が期待される。

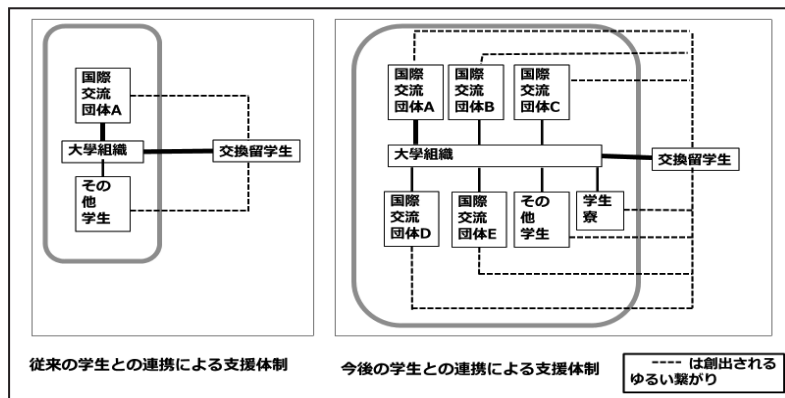


図 11：学生団体らとの連携体制（制度的 SC）（筆者作成）

上述のような学内でのSCの構築に加えて、大学側として引き続き留意すべきは留学生の来日前の心配事に寄り添うことである。前述（図8参照）のような来日前に交換留学生達が抱えている「心配事」に対して、既に来日した先輩の交換留学生がどのように対処したのか、また、学内にどんな支援があるのか、等を事前に伝えることで交換留学生がより安心感を持って来日することが可能となろう。

なお、ごく少数意見ではあるが、「留学の目的はどれくらい達成されまし

たか」という問いに対して Fair 以下の回答をした留学生がその理由を「日本語が来日前に想定していたように伸びなかった」としている。このため、来日時に語学の達成目標の期待値を調整したり、日本語学習での成長度をよりポジティブに伝える等の対応も引き続き留意が必要であろう。

さらに、本アンケートの結果から、「新しさ（新しい出会いや経験といったもの）」が交換留学生に積極的な行動を促す可能性があり、また、キャンパス外での「非日常の環境下での他学生との交流」が、ポジティブな感情につながる可能性があると考えられることから、今後、こうした点も考慮した支援を検討してゆく必要がある。

2023 年度以降、学内のイベント等での各学生団体との連携、来日前の交換留学生との交流など、学内の制度的 SC 構築のために様々な取り組みが試行されており、これらの効果等を確認しつつ、よりよい支援の在り方を検討したい。

以 上

謝辞：

本論文の執筆にあたり、明治大学菊地端夫国際教育センター長、所康弘副センター長ならびに山田亨日本語教育センター長にご助言をいただきました。また、データの収集において明治大学国際教育事務室より多大なるご協力をいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

参考文献：

- 1) 文部科学省 (2023) 「留学生交流の意義」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/attach/1412442.htm (2023 年 8 月 14 日アクセス)
- 2) 内閣府 (2003) 「平成 14 年度 ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」

<https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/2009izen-chousa/2009izen-sonota/2002social-capital> (2023年8月14日アクセス)

- 3) Uphoff, N (2000) Understanding Social Capital: Learning from The Analysis and Experience of Participation, Social Capital: A Multifaceted Perspective, World Bank

(みまき・じゅんこ 国際連携機構特任准教授)